

教養教育における古典授業の開発(1)

— 7 枚の源氏絵で読む源氏物語 —

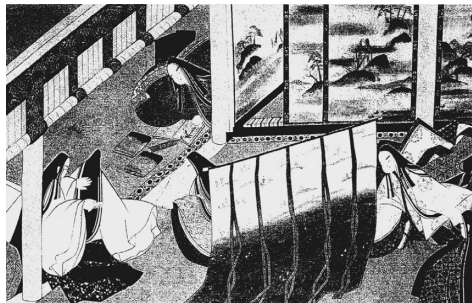
坂 東 智 子

1. はじめに

「国宝源氏物語絵巻 東屋（一）」^(注1)には、女房に洗い髪を梳かせる中の君、絵を眺める浮舟、詞書を読み聞かせる右近が描かれている。浮舟が見入っているのは絵だけの冊子で、右近が文字だけの詞書を解説を交えながら読んでいる場面である。国宝絵巻は、源氏物語が成立しておよそ百年後に作られた日本最古の物語絵巻であり、物語絵や絵巻物がどのように鑑賞されていたのかを示す貴重な資料である。絵を見つつ音読されるテキストに耳を傾け物語世界に浸るという当時の享受に近い形で源氏物語を楽しみたいと考え授業を計画した。

教養教育における古典教育については、「学生達に古典の原文だけを読ませることの困難さ」（河添 2006）、「古典の世界は敬して遠ざけるだけの人が多くなってきた」（三田村 2006）、「古典を読むための動機づけや刺激が必要である」（三田村 2006）などの指摘がある^(注2)。菊川（2007）は、「大学教育を広く生涯学習の一つ」と捉え、教養教育における古典教育では、「中・高の教科書に掲載され、多くの学生が一度は学んだ古典について、実はこんな新鮮な見方ができるよ」という「古典再発見」が必要だと述べている^(注3)。

筆者の実践は、絵画を補助資料として用いるのではなく、絵画でなくては語れないものと文字によって語るものを行き来して^(注4)、源氏物語を読む楽しさを「再発見」することを目的としている。本稿ではまず実践の概要を報告し、次に受講者のコメントカードと授業後の授業評価結果を分析することで、教養養育の古典授業に絵画的要素を取り入れることについての検討を行う。



「国宝源氏物語絵巻 東屋一」復元模写・馬場弥生制作^(注5)

2. 実践の概要

- (1) 授業名：山口大学平成 25 年度共通教育 文化の継承と創造 2「源氏物語の受容」
- (2) 実施時期：平成 25 年度後期（クォーター 4）25 年 9 月 29 日～26 年 2 月 3 日 全 8 回
- (3) 対象学生：学部 1 年生 72 名。選択必修。受講者の内訳は、人文学部 29 名、理学部 10 名、医学部 14 名、工学部 15 名、その他 4 名。6 割が理系。人文学部の一部を除いて、今後古典を学ぶ機会が極めて少ない学生が対象の授業である。
- (4) 教科書：三田村雅子 芸術新潮編集部編『源氏物語天皇になれなかった皇子のものがたり』とんぼの本、新潮社、2008。
- (5) 参考資料：①週刊朝日百科『週刊絵巻で楽しむ源氏物語五十四帖』全 60 巻、朝日新聞出版社、2001。②『源氏物語悠久の舞台をめぐる』（DVD）京都新聞出版センター③佐藤浩司『雅楽源氏物語のうたまい』（DVD 付）道友社、2012。④香老舗松栄堂広報部編『王朝の香り 現代の源氏絵とエッセイ』青幻舎、2002。⑤大和和紀『あさきゆめみし』講談社、1993。
- (6) 目標：平安時代後期から江戸時代後期に描かれた源氏絵を読み解きながら、源氏物語の世界観、主題に触れ、源氏物語への興味関心を深めて生涯にわたって古典文学に親しむ態度を身につける。
- (7) 授業の進め方：①今日の源氏絵を提示する。②どの場面か考えてもらう。③前回のコメントカードをいくつか紹介し、質問や要望に応える形で授業をすすめる。例えば、現代の源氏絵は？という質問に対して、あさきゆめみしや源氏物語千年紀に合わせて作成された現代の源氏絵を紹介する。④毎回スライドに映した原文をノートに視写してもらい、音読の後解釈をして解説する。⑤「文化の継承と創造」に意識を向けるため、源氏物語における古典の受容や源氏物語が後世の文学に与えた影響について具体例を提示して解説する。
- (8) 授業の概要

<第 1 回> 父と子の物語として源氏物語を読む

源氏絵	<p>国宝「源氏物語絵巻」鈴虫第二段、光源氏と冷泉院が対面する場面（作者不明）平安時代後期、五島美術館（東京都）現存最古の源氏絵、2000 年に発行開始の二千年札に使用されている。</p>	
-----	--	---

内 容	<p>■国宝絵巻を代表する絵。場所は冷泉院の御所。物語本文には具体的描写はほとんどなく、原作を大きく膨らませた心理劇的な構成となっている。</p> <p>■冷泉院は光源氏が父桐壺帝の中宮である藤壺と密通して生まれた不義の子。無事即位し、この時点では譲位して上皇となっている。不義密通の主題。不義の子が天皇になったという事実がこの絵の背後にある。</p> <p>■父子と名乗り合うことができない父への思いにつき動かされたかのように、冷泉院はその区分された領域から光源氏の方へ、半ば身を乗り出している。鏡に写したかのようにそっくりな二人を、上長押のラインがさえぎっている。冷泉院と光源氏をつなぐ線を延ばしてゆくと、そこには夕霧（光源氏の長男）がいる。名乗ることの出来ない息子と公認された息子が、父である光源氏を中心に一直線上に並んで描かれている。</p> <p>■夕霧が吹くのは柏木遺愛の笛。この笛はもう一人の不義の子薫を暗示するかのよう。国宝絵巻「鈴虫二」は源氏物語全編の時の流れを想起させる。</p> <p>■源氏物語はなぜ読み継がれてきたのか、二千年札になぜ使われたのかを考える。</p>
原 文	<p>御土器二わたりばかりまゐるほどに、冷泉院より御消息あり。（中略） （冷泉院）「雲の上をかけはなれたる住みかにももの忘れせぬ秋の夜の月」（中略） （源氏）「月かげはおなじ雲居に見えながらわが宿からの秋ぞかはれる 異なることなかめれど、ただ昔今の御ありさまの思しつづけられるままなめり。御使に盃賜ひて、禄いと二なし。（「鈴虫」巻）</p>

<第2回> 桐壺帝、高麗人に光君を観相させる

絵 等	<p>「源氏物語画帖」土佐光吉・長次郎、高麗人が光君を観相する場面、桃山時代、京都国立博物館 ■現京都御所の映像、大内裏の図、鴻臚館の位置。</p>
内 容	<p>■紫式部は何を参考にしたのか。この場面は『聖徳太子伝暦』の記事に酷似。『宇津保物語』俊蔭巻に、主人公7歳の時に高麗人に会い漢詩を作り交わしたとある。</p> <p>■文化の継承と創造に意識を向ける。</p> <p>■桐壺帝は愛する息子の将来を考え逡巡する。三度の占いの後、臣籍降下を決断する。</p> <p>■高麗人の予言と父帝の決断、父の遺言が光源氏の生き方を導く役割を果たす。</p> <p>■主人公光源氏が更衣腹の皇子として誕生し、天皇の父となり、自身も准太上天皇となり栄華を極めるまでの紆余曲折はこの高麗相人の予言が起点となっている。その成就こそが源氏物語の主題であるという古注釈以来の読みがある。</p>
原 文	<p>「桐壺」巻 - 高麗人の観相、源姓賜る - （前略）「国の親となりて、帝王の上なき位にのぼるべき相おはします人の、そなたにて見れば、乱れ憂ふることやあらむ。朝廷のかためとなりて、天の下を輔く方にて見れば、またその相違ふべし」と言ふ。（後略）</p>

<第3回> 父帝、光源氏と藤壺を引き合わせる

絵	<p>幻「源氏物語絵巻」作者不明、桐壺帝が光源氏と藤壺を引き合わせる場面、江戸時代前期、個人蔵</p>
---	---

内 容	<p>■コメントカードを紹介。スライドを写す時間が短かすぎる。人物関係図がほしい。原文をもっと読みたい。源氏絵をもっと数多く見たい。宇治十帖は扱うか？源氏の和歌はどの程度のものか？</p> <p>■父桐壺帝が光源氏の運命に大きく関わる。桐壺更衣への寵愛。源氏の臣籍降下。藤壺入内。なぜ、光源氏と藤壺を合わせたのか？光源氏は紫上に夕霧を合わせなかった。■源氏は亡母に似ている藤壺宮を慕う。</p>
	<p>「桐壺」巻　－光る君、かかやく日の宮－ (前略) 母御息所も、影だにおぼえたまはぬを、「いとう似たまへり」と典侍の聞こえけるを、若き御心地にいとあはれと思ひきこえたまひて、常に参らまほしく、なづきひ見たてまつらばやとおぼえたまふ。(中略)世にたぐひなしと見たてまつりたまひ、名高うおはする宮の御容貌にも、なほにほはしさはたとへむ方なく、うつくしげなるを、世の人光る君と聞こゆ。藤壺ならびたまひて、御おぼえもとりどりなれば、かかやく日の宮と聞こゆ。(後略)</p>

<第4回> 藤壺に瓜二つの少女と出会う

絵	<p>「源氏物語画帖」土佐光吉・長治郎、雀を追いかける美少女、桃山時代最も有名な源氏絵</p>
内 容	<p>■「光る君」から「光る源氏」へ。「源」は天皇家から臣籍降下したものが与えられた姓。在原業平や交野の少将の系譜を意識させる呼び名。古典から源氏物語への流れ。貴種流離譚。しかし源氏は栄華を極める。古典にはない新しい物語。</p> <p>■光源氏は北山で藤壺と瓜二つの少女を垣間見する。少女は藤壺の姪であった。</p> <p>■「手に摘みていつしかも見む紫のねにかよひける野辺の若草」(光源氏)「春日野の若紫の摺り衣しのぶの乱れ限り知られず」(伊勢物語初段)</p> <p>■藤壺と若紫。藤壺の完全無欠な魅力に対して若紫は山吹襲の普段着姿で「走り」来る。藤壺の宮に血脈の繋がる若紫の姫君がいとしくてたまらない光源氏。</p> <p>■伊勢物語と源氏物語。垣間見の場面。</p> <p>■源氏物語の散文と和歌。藤壺が置かれた状況を分析し進むべき道を選択していく思考は散文で記され、光源氏に寄せる心情は贈答歌や独詠歌のかたちで表出されている。</p> <p>■和歌から源氏物語へ、源氏物語から和歌へ。源氏物語の和歌は物語の方法の一つであり、王朝人が営んでいた和歌生活を反映している。</p>
原 文	<p>「若紫」巻　－若紫登場、走り来たる女子－ きよげなる大人二人ばかり、さては童べぞ出で入り遊ぶ。中に、十ばかりやあらむと見えて、白き衣、山吹などの葵えたる着て走り来たる女子、あまた見えつる子どもに似るべうもあらず、いみじく生ひ先見えてうつくしげなる容貌なり。髪は扇をひろげたるやうにゆらゆらとして、顔はいと赤くすりなして立てり。(後略)</p>

<第5回> 藤壺中宮の物語

絵	<p>「屏風貼付源氏物語色紙」伝土佐光則、青海波を舞う源氏、江戸時代前期、個人蔵</p> <p>■青海波の実演映像、『あさきゆめみし』花章の藤壺と光源氏の絵。(現代の源氏絵)</p>
---	---

内 容	<p>■藤壺との逢瀬。「見てもまたあふよまれなる夢のうちにやがてまぎるるわが身ともがな」(光源氏)「世がたりに人や伝へんたぐひなくうき身を醒めぬ夢になしても」(藤壺)「君や来し我や行きけむ思ほえず夢か現か寝てかさめてか」(伊勢物語 69 段)</p> <p>■桐壺帝の朱雀院行幸で青海波を舞う光源氏。(光源氏 18 ～ 19 歳) 懐妊中の藤壺の宮は複雑な思いで青海波を舞う源氏を見る。「夢の心地なむしたまひける」。「夢」が一つのキーワード。</p> <p>■青海波の舞の袖振るしぐさ。「あかねさす紫野行き標野行き野守は見ずや君が袖振る」(万葉集・額田王)。袖を振ることは、見る人の魂を呼ぶ「魂よばひ」の行為であり、愛情を示すしぐさである。</p> <p>■試楽の翌朝、光源氏は袖振るしぐさの中に藤壺の魂を求め想いをこめて舞を舞ったと和歌を贈る。</p> <p>■青海波の舞は後の源氏物語受容に大きく関わる。</p>
原 文	<p>「紅葉賀」巻　－青海波を舞う源氏－ (前略) 藤壺は、おほけなき心のなからましければ、ましてめでたく見えましと思すに、夢の心地なむしたまひける。(中略) つとめて中将の君、「いかにご覧じけむ。世に知らぬ乱り心地ながらこそ。(源氏)「もの思ふに立ち舞ふべくもあらぬ身の袖うち振りし心知りきや　あなかしこ」とある御返り、目もあやなりし御さま容貌に、見たまひ忍ばれずやありけむ、(藤壺)「から人の袖ふることは遠けれど立ちぬにつけてあはれとは見き　おほかたには」とあるを (後略)</p>

<第6回>明石の君の物語

絵	<p>「源氏物語絵巻(部分)」薄雲、住吉具慶、明石の君母娘、雪の日の別れ、江戸時代</p> <p>■現代の源氏絵「須磨」下村良之介</p>
内 容	<p>■父桐壺院の崩御と遺言。権勢は右大臣方に移り源氏の衰勢は著しかった。源氏はなお朧月夜との密会を重ねていたが、右大臣に知られることとなり自ら須磨へ退去する。</p> <p>■大暴風雨の後、故桐壺院が源氏の夢に現れ住吉の神の導きによってこの浦を去れと言う。その暁明石入道一行が源氏のもとを訪れる。入道も源氏を迎えよという夢のお告げを受けていたという。</p> <p>■父と子、母と娘、親子の物語という視点。明石の入道、明石の君、明石の姫君、匂宮をはじめとする明石の姫君の子どもたち。■「濡標」巻の宿曜。</p>
原 文	<p>「須磨」巻、「濡標」巻</p> <p>須磨には、いとど心づくしの秋風に、海はすこし遠けれど、行平の中納言の、関吹き越ゆると言ひけん浦波、夜々はげにいと近く聞こえて、またなくあはれなるものはかかる所の秋なりけり。(中略)</p> <p>宿曜に「御子三人、帝、后かならず並びて生まれたまふべし。中の劣りは太上天臣にて位を極むべし」と勘へ申したりしこと、さしてかなふなめり。</p>

<第7回>紫の上の物語

源氏 絵	「源氏物語画帖」土佐光信、源氏が紫の上に須磨の絵日記を見せる場面、室町時代後期、ハーバード大学蔵 ■「源氏物語画帖」土佐光起、源氏、紫の上の文を焼く、江戸時代前期、個人蔵（学研フォトアーカイブス）
内 容	<p>■明石の入道の娘・明石の君が光源氏と結ばれ妊娠する。都では朱雀帝が病気になる、右大臣から出世していた太上天皇が死ぬ。朱雀帝は反省して、光源氏を都へ呼び戻す。</p> <p>■故六条御息所の娘が冷泉帝のもとへ入り斎宮女御となる。斎宮女御派（光源氏の養女）と弘徽殿女御派（権中納言の娘）が絵を持ち寄って競い合う。光源氏作の須磨絵日記が勝敗を決める。■竹取物語が「物語の出で来はじめの祖」とある。</p> <p>■明石の姫君が春宮に嫁ぐことが決まり源氏はその準備に忙しい。</p> <p>■紫の上の悩み。病。遺言。そして死。「十四日に亡せたまひて、これは十五日の暁なりけり。」八月十五日、紫の上の葬送。かぐや姫の昇天を踏まえているとされる。</p> <p>■「桐壺」巻と「幻」巻。「尋ねゆくまほろしもがなつてにても魂のありかをそこと知るべく」（桐壺帝）長恨歌を踏まえ、桐壺帝は亡き桐壺更衣の死を悼んでいる。それに対して光源氏は、「大空をかよふまほろし夢にだに見えこぬ魂の行方たづねよ」（幻巻）父桐壺帝の歌を踏まえ、光源氏は紫の上の死を悼む歌を詠んでいる。父の母への想い。源氏の紫の上への想い。■第2部が終わる。</p>
原 文	「御法」巻 - 紫の上の遺言 - (紫の上)「大人になりたまひなば、ここに住みたまひて、この対の前なる紅梅と桜とは、花のをりをりに心とどめてもて遊びたまへ」と聞こえたまへば、うちうなづきて、御顔をまもりて涙の落つべかめれば立ちておはしぬ。

<第8回>まとめ

* 源氏物語の本文は、『古典セレクション源氏物語<全16冊>』小学館（1998）に拠る。

3. 受講生のコメントカードの分析

(1) 初回終了時のコメントカードより

毎時間、出席確認を兼ねたコメントカード（A5）を提出してもらった。内容は授業の感想、質問、要望など。大教室での教師側からの一方向的な授業になりがちな点を軽減させ、双方の授業にする手立ての一つである。資料1は初回終了時のコメントカードである。

資料1 初回授業後のコメントカードより（一部） *下線は筆者が付記した。

- | |
|---|
| <p>(a) 源氏物語は高校の時に古文の授業で学び興味を持っていました。もっと分かりやすく読んでみたいと思い漫画も買いましたがまだ全部読み切れていません。この授業では絵巻の絵に触れながら内容についても教えてもらえるということがとても楽しみにしています。なぜ源氏物語が日本の古典として読み継がれてきたのか積極的に理解していこうと思います。(医、女)</p> <p>(b) 源氏物語について、高校の2年生の時以来滅多に触れてこなかったので、久しぶりに</p> |
|---|

源氏物語についての話や絵巻を見て、なつかしく思いました。冷泉帝の生い立ちや薫の出生の秘密についても以前に読んだ時に知っていましたが、絵巻で読み解くという手法は初めて経験しました。先生の解説を聞いて、冷泉帝と源氏、夕霧と一直線に並んでいるのが分かった時に、出来た構図過ぎて思わずぞっとしました。(理、男)

- (c) 源氏物語は高校の受験勉強などにも出て来て、ある程度の内容は知っていたけど絵画的な観点からは見たことも考えたこともなかったので、知らないこともたくさんあったので次の講義が楽しみです。(人文、男)
- (d) 源氏物語は人間関係が複雑で全体を通して見るということが難しかったのですが、不義の時系列にまとめられた流れを見ると、少し分かりやすく感じました。今まで源氏物語を文学作品や文化を読み取るものであるとしか捉えていませんでした。しかし、今回の話を受け、権力者から権力者へと渡っていった歴史を知り、源氏物語を歴史のなかの価値、役割から見る新たな観点に気づかされました。そこから見る日本の歴史、日本人の姿について考えていきたいと感じました。(人文・女)
- (e) お札に使用されるような絵なのに、物語本文に具体的な描写がほとんどない絵ということを知りおどろいた。また、絵の背景には不義密通や不義の子が天皇になったということがあるのになぜお札にまでしたのかについてもっとくわしく知りたくなった。(工・男)

高校の授業や受験勉強で学んだ源氏物語を再読したい、もっと知りたいという思いを文系理系男女を問わず多くの学生がもっている。これは選択必修の授業であることと関係があるだろう。源氏物語に興味がない生徒は選択しない可能性が大だからである。だが、受講生の中には抽選で仕方なく履修しているものも少なからずいる。高校生の6割以上が「古典嫌い」という調査結果がある。古典そのものが嫌い、読みたくないということではないのかもしれない。試験のため、受験のために古典を勉強するのが嫌いと考えることもできよう。大学1年生は受験から解放されて新しい古典との出会いを期待している時期だといえるのではないか。生涯にわたって古典に親しむ橋渡しとして「知っているつもり」の古典の面白さを新しい視点から再発見する、そのために「絵巻で読み解く」という手法は生徒達にとって新鮮に感じられたことがわかる。

(2) 授業終了時のコメントカードより

資料2 授業終了時(7回目)のコメントカードより(一部)

- (a) 7回の授業を通して、源氏物語の絵巻と本文を見ながら内容についても取り組み非常に面白かった。流れとして知っていた知識では分からなかったような、細かい伏線などに感心させられたし、以前よりも源氏物語のすごさを身に感じ、ここまで考えられた物語であるからこそ、現代にまでずっと受け継がれ日本人に好かれてきたのだろうと思った。長編であるにもかかわらず、最初の巻から最後の巻まで、様々な箇所でも前の巻との関連を思い出させ、親子の愛、夫婦の愛なども盛り込んであり、文学的にも人の心や考え方についても、読み手にとっては学ぶことがたくさんあったのではないかと思う。ど

うにもできない気持ちによって行動してしまったり、誰にも言えないことを一人でかかえ込んだり、愛する人が自分の思い通りにならなかったり、ということは誰にでもあることと思う。そういう所に人々は共感し、多くの人によって読まれているのだろうと思う。(人文・女)

- (b) 光源氏とその父、桐壺帝の歌のよみあいはいろんな想いがこもっていて、あまり見たくない歌もある。死をいたみ、2人が歌をよみあう場面は、今日はじめて知りました。「源氏は父と子の物語」と先生はおっしゃいましたが、その発想はありませんでした。源氏物語といえば、まだまだ解きあかされていない千年の謎、光源氏の恋愛などというイメージが強く、「父と子の物語」というのは、「ああ！！なるほど！！」と思いました。たしかに、源氏物語では光源氏の恋愛の話もですが、桐壺帝と光源氏、光源氏とその子供の話が多く書かれているように思えます。あと1回(テスト)でこの講義は終わってしまいますが、私は理系のため、この光源氏物語のような文学に触れる機会はほとんどゼロであると思いますが、源氏物語はとても好きなので、これからも、たまに読んだり、源氏絵を見たりしたいと思います。今まで知らなかった源氏物語の世界が知れてよかったです。(工・女)
- (c) 「幻」巻で光源氏が紫の上の死を悼んで読んだ歌が、桐壺帝が桐壺更衣を亡くした時に詠んだ歌を踏まえていることを知って、改めて和歌の世界の奥深さを感じた。私も藤原俊成が好きなので、この歌と俊成が詠んだ歌がつながっていることを知って感動した。源氏物語が後世の和歌の世界にもたらした影響がどれほど大きなものであったかが分かり、源氏物語の偉大さを感じた。この講義を通じて、源氏物語がさらに好きになったし、様々な見方ができることを知った。春休みは、源氏物語を含め、好きだった古典をもう一度読み返してみたい。(医・女)
- (d) 紫の上の死の場面ではいつも無性に虚しくなってしまう。様々な人の盛衰がある源氏物語の中でも格別な悲壮感のあるこの場面。光源氏に振り回され続けたともとれる一生の終わりを迎える紫の上は何を思っ^{ママ}て亡くなったのだろうか。源氏物語を全て読んだこともあるがこの場面だけは好きになれなかった。この授業では源氏絵を中心に源氏物語を読んできたが、ただ物語を読むのとは少し違った物語の見え方がして面白かった。(人文・男)
- (e) 紫の上が死ぬとき、遺言のように歌をよむなんてすごいと思った。遺言の内容も花を見守ってくれなんていう内容で死ぬ間際と思えなかった。源氏絵も自分の子どもではない子を間にはさんでいてどんな気持ちだったのだろうか。死んだ日もかぐや姫の昇天をふまえていると聞き驚いた。(工・男)
- (f) 周りの人からは源氏の子だと思われているが本当は柏木の子であるかおるを抱えている場面は過去に桐壺帝が藤壺との子だと思っていたのが本当は源氏の子だったことがあったのでおもしろい場面だなあと思いました。源氏はかおるが柏木の子だと知っていたが、先生がおっしゃられたよう桐壺帝は藤壺との子を本当の父親が源氏であると知っていたのかどうなのかというところはすごく気になりました。また紫の上が亡くなるところで紫の上の遺言を三の宮にたくした場面では遺言の文をよんでその場面を想像してしまっ^{ママ}て泣きそうになってしまいました。涙がでてはずかしくて立ち去ってしまった三の宮はああ5歳の男の子だなあ、かわいいなと思いました。古典をふまえているということで、紫の上が亡くなった日が15日の暁でかぐや姫の昇天とかさなっているというのは初めて知ってびっくりでした。親の桐壺帝と子の光源氏という親子関係が源氏物語の中で重ねあわせられながら話が進んでいくのを知って、源氏物語を見る視点を変えればこんなにも物語の見え方やとり方がちがってくるんだなあと考えさせられました。新しい視点でこの物語を読めてよかったです。(理・女)

授業に絵画的要素を取り入れた点に関して肯定的なコメントが多かった。例えば、資料2の(d)「ただ物語を読むのとは少し違った物語の見え方がして面白かった」や(f)「源氏物語を見る視点を変えればこんなにも物語の見え方やとり方がちがってくるんだなあ」は、絵を用いることによって、これまで意識しなかった物語の別の面が照らし出されたことを示している。源氏絵を提示することで、新しい視点からの読みの輪郭が見えやすくなったと考えられる。(b)にあるように、本授業は、源氏物語を「父と子の物語」として読み直すことを試みた。初回の「国宝源氏物語絵巻 鈴虫第二段」はこれを目に見える形で示すものであった。絵画を用いてビジュアル的に示すことによって源氏物語の全体像や場面、人物関係、主題が捉えやすくなり、原文を読むことの抵抗感がやわらげられている。源氏物語がそれ以前の和歌や物語、漢籍の発想や表現を巧みに織り込んで創作されていることへの言及も、絵画と原文を行き来しながら読むという手法を採らなければ困難が大きかったといえる。

(b)(c)のように今後も古典作品を読んでみたいといった感想もみられた。

4. 受講生の授業評価の分析

後掲資料3と4は、授業後に実施された授業評価アンケートの一部である。受講登録は72名、アンケート回収数は70である。

資料3 質問1. 1 あなたはこの授業にどれくらい出席しましたか。

回答選択肢	評価値	回答数	構成比	科目平均
1. 90%以上	5	68	97.1 (%)	88.2 (%)
2. 80～90%	4	2	2.9 (%)	8.8 (%)
3. 60～80%	3	0	0.0 (%)	2.5 (%)
4. 40～60%	2	0	0.0 (%)	0.1 (%)
5. 40%未満	1	0	0.0 (%)	0.1 (%)
－非回答等	－	0	0.0 (%)	0.2 (%)
評価指数		－	4.97	4.85

資料4 質問1. 10 この授業はあなたにとって満足のいくものでしたか。

回答選択肢	評価値	回答数	構成比	科目平均
1. そう思う	5	45	64.3 (%)	53.8 (%)
2. ややそう思う	4	16	22.9 (%)	27.2 (%)
3. どちらとも言えない	3	7	10.0 (%)	12.9 (%)
4. あまりそう思わない	2	2	2.9 (%)	2.8 (%)
5. そう思わない	1	0	0.0 (%)	1.3 (%)
－非回答等	－	0	0.0 (%)	1.8 (%)
評価指数		－	4.49	4.31

選択必修であったが、90%以上授業に出席したものが70名中68名であった。(資料3)

5. 成果と今後の課題

教養教育の古典授業に絵画的要素を取り入れることの効果について以下の5点を挙げる。

- ①例えば、国宝「源氏物語絵巻」では、各段の絵にかなり離れた場面を想起させるような要素が描かれ時間が多層化している。絵を見ることによって、離れた物語本文についての記憶が呼びさまされ、再構成され意味が生成される。これにより「源氏物語再発見」の場が生まれた。
- ②絵を読み解くことは、絵の制作者の源氏物語受容を読み解くことである。源氏物語受容者の集合的記憶と学習者個人の個の記憶が交差して新しい読みの場が生成された。
- ③絵画的要素を授業に取り入れることで、源氏物語の全体像や場面、人物関係、主題が捉えやすくなった。新しい視点からの読みの輪郭が見えやすくなった。
- ④原文を読む動機が生まれた。
- ⑤絵画でなくては語れないものと文字によって語るものを行き来して、源氏物語を読む楽しみが増幅された。

今回の授業で見出された問題点は大きく次の3点にまとめられる。

- ①8回の授業で第1部2部を扱ったため大枠の理解にとどまった。場面を絞り、絵画をじっくり見て、本文と行き来しながら詳しく読むこともできなかったのではない。
- ②大教室でスクリーンが前方に1つであった。後方の生徒には絵の細部が見えづらかった。
- ③著作権等の知識が不十分で、プリント配布ができなかった。

取り上げる絵画と本文を厳選すること、ICT設備の問題、著作権の問題の3点である。

美術館等で行われているビジュアル・シンキングという教育プログラムがある。古田(2006)はこれを「国語科教育・言葉領域の学習活動」に援用できる質のものであると述べ、その活動過程を次のように整理している^(注6)。

- a) 美術館等の収蔵品等を「よく見る」活動
- b) 自らの心の中にわき上がる言葉に耳を澄まして「考える」活動
- c) 自らの言葉を周囲の人々に「話す」活動
- d) 周囲の人々の言葉に耳を澄まして「聞く」活動
- e) 再び「見る」活動へ……………

小中高や大学の古典授業で絵画を扱う場合、上の活動過程を本文を読む過程と連動させて授業を組み立てることが必要であろう。今回の筆者の実践では上の活動過程を保障することができていない。今後の大きな課題である。

注

- (1) 『国宝源氏物語絵巻』（徳川・五島本絵巻）は、1109～1150年頃に成立したと考えられている。その内容がみごとに作品世界の機微を拾いあげている。一つ一つの場面構成が独特で、以後に制作された絵の場面とほとんど重なっていない。新しい作品解釈を展開しており作品世界の深みへ引き込んでくる魅力をもっている。（参考文献5）
- (2) 『国宝源氏物語絵巻』復元模写完成時に行われた座談会での発言から。「描かれた源氏物語－復元模写を読み解く－」（座談会：佐野みどり、三田村雅子、河添房江）『描かれた源氏物語』翰林書房、2006、pp.8-49。
- (3) 菊川恵三（2007）「生涯教育における古典指導－古典再発見－」『日本語学』26巻2号、pp.62-69。「既に知っていると思っていたものが、こんなに違うのだと知った時、学生たちの驚きは大きい。」と述べ、驚きが「改めて作品を読み直す」契機になるとしている。
- (4) 三田村雅子は、「私たちは物語をこれまで文字情報だけで読んできましたが、実は昔の人たちは必ずしも文字情報だけでなく、建物や工芸品や景観、季節感などに助けられて享受してきました。（中略）古典の言葉を学ぶってということも、まさにそういうさまざまな周辺知識っていうものとともに学びたいと思いますし、絵を読み解く方法を文章を読み解く方法と同じくらい洗練させることもできるのではないかと考えています。補助教材としての絵画ではなく、絵画でなくては語れないものと文字によって語るものを行き来して、楽しみを増幅させていきたいなと思います。」と発言している。（注2に同じ）
- (5) 国宝絵巻は剥落が著しいため復元模写されたものを示した。復元プロジェクトの全容は参考文献6に詳しい。p.112。
- (6) 美術館の中での実践に限らず、複製やスライドを用いる場合もあるとしている。古田雅憲（2006）「ビジュアル・シンキングの国語教育への援用について」『人間科学論集』第2巻第1号、西南学院大学、2006、pp.17-40。

<主要参考文献>

- (1) 古田雅憲ほか（2001）「国語科教育における「絵解き」の意義と指導－さし絵を「読む」授業の取り組み」（「語学と文学」37号、群馬大学語文学会）
- (2) 古田雅憲（2012）「『若紫』授業化の構想－挿絵を援用する古典学習の試み－」（「人間科学論集」第8巻第1号、西南学院大学）
- (3) 菊川恵三（2000）「マンガを用いた古典文学教育の試み－『源氏物語』と『あさきゆめみし』－」（「和歌山大学教育学部紀要」）

(76)

- (4) 井上泰 (2013) 「絵画の教材化－古典学習の拡充に向けて」(「国語教育研究」54 巻、広島大学教育学部国語教育会)
- (5) 水野僚子 (2006) 「＜描かれた源氏物語＞のための文献ガイド」(注 2 に所載) に多数紹介。
- (6) NHK 名古屋取材班 (2006) 『よみがえる源氏物語絵巻全巻復元に挑む』NHK 出版
(ばんどう ともこ・山口大学)